

ハピネス童話



上村ひでみ

『早く』より『ゆっくり』

子犬の けんた は のんびりやさんです

いつも なんでも まったり まったり しています

幼稚園にいくと いろんな お友達がいます

まだ 靴を 片方しか はいてないのに 駆け出そうとするお友達や

けんたが 両足に靴を はきおわっても まだ 片足の 靴を 一生懸命 はいているお友達もいます

みんな それぞれのペースがあります

けんたは 朝も ゆっくりおきます

目覚ましが なる 少し前に チュンチュン となく 可愛い インコのさえずりで 目が覚めます

でも 暖かい お布団が 気持ちよくて なかなか 起きようという気持ちに なれません

『けんちゃん お早う』 お母さんが 優しい声で 起こしにきました

『けんちゃん 朝ごはん できたよ

けんちゃんが いま 起きて キッチンにきてくれたら お母さん すごく すごく うれしいなあ～

でもね

けんちゃん

ゆっくりで いいからね』

お母さんは 優しい声で そう言って キッチンに いました

けんたは お母さんが 世界で一番 大好きです

大好きすぎて

つい 独り言でも

お母さん大好き♪

というくらいです

大好きな お母さんが すごく うれしいんなら ぼく いますぐ おきてあげようっと

けんたは 気持ちよいお布団を 元気よく 飛び出しました

『しゅわっち〜』

そして バタバタ 階段を おりて
キッチンに到着しました

『わあ けんちゃん すぐ きてくれたんだあ

お母さん すごく すごく うれしいなあ

ありがとうね けんちゃん』

お母さんは けんたを ぎゅっと 抱き締めました

けんたは お母さんが 喜んでくれて 嬉しくなりました

お母さんが 嬉しいと 自分も 嬉しいからです

幼稚園で 今日も たくさん遊びました

あっという間に お迎えの 時間になりました

仲良しの まさと君の お母さんが お迎えにきました

まさと君は すこし あわてんぼうな ところがある 仲良しさんです

いつも うまくいかないことがあると

とても がっかりとして

『ぼく のろま だからなあ』と 悲しそうな顔をしました

まさとくんは お母さんを みつけると カバンを持って 走りました

そして 何かにつまづいて すってえんと 転んでしまいました

『もお〜 なにやってんのよ この子ったら ちゃんと 足元を 確かめてから 走りなさい

しっかりしなさい』

と お母さんが プンプンしながら 言いました

まさとくんは 悲しそうな 顔をしながら そっと歩いていきました
靴をはいていると

『早くしなさい もお あんたは いつも のろま なんだから』

と お母さんが いいました

『お買い物行かないと いけないのよ

ほら 早く 早く 』

まさとくんは いつもなら

けんたより 早く 靴がはけるのに

なぜだか お母さんの前だと うまくはけません

そして 少し 涙ぐんで
『 さよなら 』と 先生に いいました

先生は まさとくんの 頭を なでて

『 また 明日ね 』と言いました

そのあと けんたの お母さんが 迎えにきました

『 けんちゃん おまたせえ 』

いつもの 優しい声で ニコニコしながら 先生にも ご挨拶をしていました

けんたは いつもどおり

まったり まったり 帰る準備をしました

その間 お母さんは 先生と 笑いながら 立ち話を していました

けんたが 靴を はこうとしたら

『 けんちゃん ゆっくりで いいからね 』
と いてくれました
先生が

『 けんちゃんは 靴をはくのが とても 上手に なったんですよ

いまでは だれよりも 早いんですよ 』 と お母さんに 言いました

『 まあ ほんとなんですか？

すごいわねえ
けんちゃん
お母さん うれしいなあ

けんちゃん いつのまに 上手くなったの？ 』

『 お母さんの 魔法の言葉 の せいなんですね

わたしも 見習わせて いただきますね

ありがとうございます 』

先生が 頭をさげて お母さんに 言いました
お母さんも 笑顔で 先生に 頭を下げました
そして 二人は 笑いました

『 けんちゃん は いつでも ゆっくり で いいのよ

けんちゃん の ペース で いいのよ

お母さんは 大人だから けんちゃんに 合わせることが できるし
それが お母さんの 仕事 なんだからね 』

けんたは よく わからないけど

大人って すごいなあ と 思いました

まさとくん の お母さんは どうして

ゆっくり と 言わない んだろう

どうして 早く早くって 言う んだろう

まさとくん
泣いていたのに

お母さん 気づかなかったのかなあ

けんたは とても 不思議 だなあ と 思いました

次の日 まさとくんは おばあちゃんと 幼稚園に やってきました
『 田舎から おばあちゃんが 来たんだよ 』 まさとくんは うれしそうに 言いました

まさとくんが 靴を 脱いだり

スモックを着るときに おばあちゃんは

『 ゆっくり で いいけんね

まあ まあ まさとは なんでも 上手に できるねえ

すごい すごい 』 と 誉めて いました

まさとくんは 嬉しそうに していました

先生が そばで おばあちゃんに なんども 頭をさげて いました

『まさとくん よかったねえ』

先生は まさとくんの頭をなでながら

『おばあさん
まさとくんは なんでも 早くて 上手にできるんですよ

家でも たくさん ほめてあげて くださいね
よろしく願いいたします』といました

まさとくんは いつもより 元気に 幼稚園で 遊びました

けんたも なんだか 嬉しくなりました

そして 今日
おばあちゃんとお母さんが二人で お迎えにきました

いつもは『早く早く』という お母さんが 今日は何もいません

おばあちゃんが『まさと ゆっくりで いいけんねえ』

『わあ まさとは なんでも 早くて 上手にできるねえ』と ほめました

まさとくんは いつもの 二倍 はやく 準備ができました

でっかい声で

『先生 みなさん さようなら』と 言ってお母さんと 手を繋いで 帰りました

そして

そのあと

クスクス笑いながら けんたのお母さんが お迎えに きました

お母さんと 先生は

『よかったですねえ』と 笑顔で 言いました

おわり

失敗したら褒められる

子猫の みいこ は おてんばです

毎日が新しくて、楽しいことばかり ♪

はじめて 目にするものには さわってみたくなり

嬉しくなると ぴょんぴょん 跳ね回りたいくなり

びっくりすると 走り出したくなります

今日は どんな 楽しいことが あるのかなあ～

みいこは 朝 目が覚めるのが 嬉しくてたまりません

『お母さ～ん

お外に 遊びに いってきまあ～す 』

元気に 外に 出ようとした みいこは 扉を開けて びっくりしました

外は ザアザア 雨が ふっています

みいこは 仕方なく お部屋で 遊ぶことにしました

『はい みいこちゃん 朝ごはんよ

ここに 置いておくわね 』

お味噌汁と お握りと リンゴジュース です

みいこは もぐもぐ 食べました

リンゴジュースを 一口飲んだあと

急に ダンスを 踊りたくなりました

習いたての ダンスを 歌いながら 元気よく 踊りました

お母さんは キッチンで クスクス 笑っています

みいこは 器用に 片足で クルクル 回りました

とても 上手に クルクル クルクル

『 ガシャーン 』

すごい音がしました
びっくりした みいこは 踊りを ぴたっと やめました

足元に 割れたコップと リンゴジュースが こぼれていました

びっくりして じっとしていると

キッチンから お母さんが タオルを 持って 笑顔で 歩いてきました

『 みいこちゃん けがしなかった？ 』

大丈夫ね うんうん 』

『 あらあら リンゴジュース こぼれたねえ
あらあら コップさんは 割れたねえ～ 』

みいこは まだびっくりして
胸が 少し ドキドキしていました

だから 口から 言葉が でてきません

『 みいこちゃん

コップさん どうして 割れちゃったのか お母さんに 教えてくれる？ 』

お母さんは いつもどおりの ゆっくりした 口調で みいこちゃんに たずねました

みいこは 考えてみました

どうしてだろう？

みいこは わかりませんでした

わたし... 踊ってただけで

なぜ 割れたんだろう
みいこは 考えてみました

そして

思いついたことを 言ってみました

『 クルクル してたときに 当たったのかなあ 』

お母さんは

『そうなんだあ』と言いました

『他には なにか あるかなあ？』と言われたので

『テーブルの側で遊んだからぶつかったのかなあ』

『ふうん そうなんだあ

他には？』

『まだ ジュース ぜんぶ 飲んで なかったから こぼれちゃったのかなあ』

みいこは 思い付くままに いってみました
すると お母さんは言いました

『みいちゃん すごいわねえ

そんなに たくさん 考えられるなんて

えらいわねえ』

そして お母さんは

『みいちゃん
教えてくれるかなあ
どうやったら コップさんは 割れなかったかしら？』

みいこは また 思い付くままに 言ってみました

『うん ジュースを 全部 先に 飲んで キッチンに 片付けちゃう』

『うんうん 他には？』

『えとね

割れない コップにジュースを いれちゃう』

『うんうん 他には？』

『食べながら 遊ばない』

『飲み物の 近くで 踊らない』

『わあ みいちゃん すごいすごい

ほんとに たくさん 言えて えらいね』とお母さんは みいこちゃんを 誉めてくれました

そして言いました

『じゃあね みいこちゃん

コップさんは 割れちゃっていま どんな 気持ちか 教えてくれる？ みいこちゃんなら コップさんの 気持ち わかるかもしれないかなあ と思うの』

みいこは コップさんを見ながら 考えました

コップさんの気持ちになってみました

もし わたしが コップさんだったら どう感じているだろう

すると だんだん コップさんの気持ちが わかってきました

『お母さん
コップさんね 泣いてる』

『どうして 泣いてるの？ 教えてくれる？』

『あのね

ぼくは みんなに 美味しく 飲み物を 飲んでもらいたくて コップに 生まれてきたんだ
もう 割れてしまったから その 役目が できなくなってしまったんだ

だから 悲しい

そういつてるよ』

なんだか みいこは それを 言いながら 悲しくなりました

『そっかあ コップさん 悲しくて 泣いてるんだね

みいこちゃん コップさんになんて 声をかけてあげたら いいのか 教えてくれる？』

『コップさん ごめんね (ρ__一)ο

もう 割れないように 遊ぶから

ごめんなさい』

みいこは コップさんに あやまりながら お母さんと一緒に お片付けをしました

一緒に お片付けを しながら お母さんは
『みいこちゃんは 優しいね

とても いい子 だね』と 誉めてくれました

みいこは それ以来
朝ごはんを 食べて
お片付けを してから
うんと おてんばを するようになりまし
た
大好きな コップさんを もう 悲しませたく
ないからです

そして 優しいお母さんにも 悲しい思
いを させたくないからです

今日も みいこは とびきりの おてんば
です

おわり

怒っている人は意欲的

子ぶたの たろうくんは 公園が 大好きです

今日はお父さんが お休みの日です

ランチを食べてから お父さんと 公園にやってきました

お父さんと こちょまし比べを しながら きゃっきゃと 走り回りました

『やかましい〜〜〜』

ベンチに すわっていた おじいさんが 大きな声で 言いました

たろうは びっくりしました

お父さんは

『どうも すいませんでしたあ〜

ご迷惑おかけしました

』と 頭を下げました

おじいさんは ブツブツと 何かを言っていました

お父さんは 少し 離れた場所まで たろうを つれていきました

大きな 大きな公園なので また そこで いっぱい 走り回りました

砂場や 小さな 池や いろんな 遊びが できるようになっていました

砂場では 一人の 男の子が お城みたいな 建物に トンネルをつくっていました

とても 楽しそうでした

『なかなかすごい作品だなあ』 たろうのお父さんは 感心しました

『つよし～ 帰るわよ ～』

男の子の お母さんが呼びに来ました

男の子は 後ろをふりむきましたが
また トンネルをつくりはじめました

お母さんが そばまで来て いいました

『もう 聞こえなかったの？ 帰るわよ

はやく 来なさい

時間がないのよ

お母さん 急いでるんだから

やること たくさんあるんだからね』

男の子は 悲しそうな顔で したを向きました

お母さんは 無理矢理 手を引っ張って いました

男の子は うしろを 向きながら ひきずられるように 離れていきました

『かわいそうになあ

もう少しで すごい トンネルできたのになあ』

お父さんは 言いました

お父さんと 手を繋いで
たろうは 公園を歩きました

さっきのベンチに まだ おじいさんが 座っていました

『さきほどは 大声で 失礼いたしました』 お父さんが おじいさんに 頭をさげました
おじいさんは うつむいていましたが

顔をあげました

たろうくんを じっとみて

ぼけっとに 手を入れて キャンディーを 出しました

『ほれ ぼうず』といって

たろうくんの手にキャンディーを のせました

『ありがとうございます』
お父さんは 笑顔でいました

『うむ』 おじいさんは 笑わないで ただ うなずきました

『おじいちゃん ありがとう』 たろうが そういうと

少し 笑いました

公園をでたところで たろうは お父さんに いいました

『おじいちゃん 怖くないね』

『うん 怖くなんかないよ』

優しいんだよ ほんとはね』

『でも 最初 おじいちゃん 怖かったね』

なんで いまは 怖くないの？』

お父さんは 手をつなぎながら 言いました

『うん さっきね 砂場で 小さな 男の子が いただろう

おじいちゃんは きっと あの 男の子みたいに いつも いつも

やりたいことを 目一杯 やらせてもらえなくて 悲しい思いを たくさん したんだと 思うよ』

たろうは

ふうん

そうなんだあ

と 思いました

『いつもいつも？』

『うん いつもいつもだよ

こどもは 大人の都合に あわせて がまんをしなくちゃ いけないときがあるんだよね
でも ほんとうは 大人が こどもに あわせてあげなくちゃ いけないんだよね

とくに 小さいときはね

でもね それが 大切だっていうことを しらない 大人が たくさん たくさん いるんだよね』

お父さんは すこし くやそうな 顔をして たろうを みました

『たろうは 絵を書いているとき

ご飯も 食べないとき あるだろう

お母さんが

ごはんできましたよ～

て いても

まだだめえ～

て たろうは よく いってるだろう(笑)』

たろうは 思い出しました

いつも

まだ だめえ～

と 言って最後まで書いていました

書いた絵を もって

お母さんに 見せてから ご飯を たべました

お母さんは いつも

『 あらあ すごい うまいわねえ

一生懸命 書いてたわねえ

最後まで かけて えらかったわねえ

お手手 洗ってきたら さらに えらいわよ』

と 言います

『 お母さんは 絶対 たろうに 無理矢理 ご飯 たべさせたり しないだろう 』

『 うん 』

たろうは それが 当たり前と 思っていました

でも 砂場の 男の子の 悲しそうな 顔を 思い出しました

『 お父さん あのこ また あした トンネル できたら いいね 』

お父さんは 笑顔で

『 そうだね

あしたは できたらいいね 』 と 言いました

夜、たろうくんは
夢を見ていました

砂場の小さな男の子がお母さんに無理矢理手をひかれていきました

涙をポロポロ流していました

そして
いつの間にか
男の子はあのおじいちゃんになってベンチにすわっていました

楽しそうにはしゃぐ子どもをおじいちゃんはみていました

みていたら無性に腹がたってきました

きづいたら立ち上がって怒鳴っていました

『うるさい』

怒鳴ってもやはり腹がたちました

涙がでてきました

だれもわかってくれない
だれも大切にしてくれない

おじいちゃんはそう小さい声で言いました
たろうは小さなこぶたの天使になっていました

おじいちゃんの背中からおじいちゃんを抱き締めました

『大好き 大好き 大丈夫』と声をかけました

おじいちゃんはいつの間にか小さい男の子になっていました
二人で砂場にいました

一緒にお城やトンネルを作りました

時間なんて気にしないで

一生懸命つくりました

すごく かわいい 作品が できました

ピカピカに光っていました

お父さんや お母さんに みせたいなあ

ほめてもらいたいなあ

たろうくんは 思いました

男の子のほうを向いて

『上手にできたねえ

がんばったねえ』

と いつもお母さんがいってくれた言葉をいってみました

男の子は ニコニコしてくれました

たろうくんは めちゃめちゃ うれしくなりました

アハハ(≧▽≦)

アハハ(≧▽≦)

笑いながら

目が覚めました

お父さんに 夢の話をしました

『そうかあ

よかったなあ

たろうは一緒に遊んだんだね

あのおじいちゃんもほんとうは怒りたいわけじゃないんだよね

遊びたかったんだよ

そしてね

誉めてほしかったんだよね

頑張ったねって言ってほしかったんだよね』

お父さんは優しい顔でいいました

そしてたろうの頭をなでました

おわり

短所は長所

コザルの まさくん は あわてんぼうで 早とちりです

いつも 考える前に 走り出してしまい お母さんに 叱られてばかりです

『もう まさくん やる前に 考えたらどうなの？

いつも 言ってるでしょ』

まさくんは、遊んでいても すぐに 気が散ってしまいます
積木をしている最中に

お絵かきがしたくなり
積木を出したまま クレパスを 出してしまいます

お絵かきを していたら

パズルがしたくなります

お絵かきを 片付けないまま パズルをしてしまいます

気がつけば お部屋には ひろげた 玩具が ぐちゃぐちゃになっています

そんなところを お母さんが みつけたら もう たいへんです

『まさくん！！

何してるの

ちゃんと ひとつのことに 集中できないの？

あれこれ 気が散るのは いけません

ひとつひとつ終わらせてから 次のことを しなくちゃ

ろくな 大人になれませんよ！ 』

お母さんは プンポンです

片付けないと おやつなしですと 脅されてしまいます

まさくんは

気が散るだけなので

パズルにあきたら 積木を したいと 思っていました

お絵かきも そうでした

気持ちが 向かないことは やる気が でない

ただそれだけのことなのですが

お母さんには その 気持ちは 理解できません

それどころか

気が散るのは 悪いことと 信じています

可愛い まさくんが 立派な 大人に なるように お母さんとして きちんと しつけるのが 自分の 役目
なんだと 信じ込んでいるのです

ただそれだけなのです

でも

でも

まさくんは

悲しくて 寂しいのです

自分の気持ちを わかってもらえなくて 叱られて 悲しいのです

近所にある 文房具屋さんの おじいちゃんはお店の前に 椅子をだして いつも まさくんたちと 手遊びを してくれたり

昔話をしてくれています

お母さんに 叱られて しょんぼりしながら
消しゴムを 買いに来た まさくんを 見つけて 声をかけてくれました

『まさくん 元気ないかな？ 何か あったのかい？』

『うん ぼく お母さんに 叱られた』

おじいちゃんは まさくんの 小さな手を にぎにぎしながら

『話してごらん』と 優しく いってくれました

『ぼくね すぐに 気が散るの

ひとつの ことに 集中できないの

なんでも 途中で あきちゃうの

すぐ 違うことを したくなっちゃうの

だから お部屋が ぐちゃぐちゃなんだ』

したを向きながら まさくんは 言いました

おじいちゃんは

うんうんと うなづきました

『そうかあ

まさくんはすごいんだねえ』

え？ と まさくんはおじいちゃんを みました

『うん おじいちゃんは こう思うよ

まさくんは いろんなことを 同時に やる 才能を 持っているんだね

なかなか すごい才能だよ

誰でも ひとつのことなら 簡単に できるだろう

でも まさくんは やりかけたことを やめて 違うことを することが できるんだよね

気持ちや 頭の 切り替えが できる すごい 柔らかい 才能なんだよ 』

『わあ ぼく すごい才能なんだね

知らなかったよ 』

おじいちゃんは 手をにぎりながら 笑顔で うなづきました

『まさくんの 才能は お母さんにも あるんだよ 』

『え？ お母さんもなの？ 』

『 そうだよ

まさくんのお母さんは

朝ごはん 作りながら

みんなを 起こしながら お弁当 つくりながら

洗濯しながら テレビの天気予報みながら

身支度しながら ゴミだししてるだろう 』

まさくんは 朝の 忙しそうな お母さんを 思い浮かべました

『 わあ ほんとだあ 』

『 ね まさくんのお母さんは 天才だよ ねえ
おじいちゃんには できないよ

むりむり 』

まさくんは なんだか うれしく なりました
お母さんを ほめられて
自分のことも ほめられた みたいな 気分になりました

家に帰って お母さんに さっそく 言いました

『 お母さん

文房具屋さんの おじいちゃんが ね

お母さんは 天才なんだよと 言ってたよ 』 と

お母さんは

びっくりした顔を していました

文房具屋の おじいちゃんは

実は お母さんが 小学生の時の 担任の先生 だったのです

お母さんは その 先生だった おじいちゃんに 電話をしました

そして なにが 天才なのかを 聞きました

次の日

いつものように

まさくんが

部屋を 玩具で いっぱいにしていました

お母さんは それを 見つけていました

『う...うん...

まさくん

楽しそうね～

まさくんは 一度に いろんな ことを することができる 天才なんだね

すごいねえ

お母さん

まさくんのお母さんになれて ほんとに うれしいなあ』

まさくんは びっくりしました

お母さんは 少し はずかしそうに 笑っていました

まさくんはお母さんに 飛び付きました

『お母さん

だあいすき～

お母さんも 天才だよ～

ぼくも お母さんの こどもで うれしい～』

お母さんはまさくんをいつもより強めにぎゅっと抱き締めました

そして、小さな小さな声でいいました

『先生... ありがとうございます(u_u)o〃』

おわり

言葉は嘘をつく

小鹿のめぐちゃんはとってもおしゃまさんです

学校では給食係りをしています

みんなのお世話をするのが大好きなのです
将来はナースになりたいのです

でもまことくんだけは少し苦手です

なぜかというともことくんはいじわるだからです

朝だれが『おはよう』と言ってもまことくんは何も言いません

そしてすぐに『ばかやろう』と言います

『あっちに行け』
とか『うるさい』とか言うのです

みんなまことくんがどんどん嫌いになってきました

まことくんは先生にも同じことをいいます

真弓先生は優しいのでそんなまことくんにもみんなと同じように声をかけています

ある日、席替えがありました

めぐちゃんはまことくんのとなりになりました

嫌だなあと思いました

一時間目は算数です
まことくんの方をみたら教科書がありません

めぐちゃんは教科書を真ん中にだして言いました

『まことくん一緒にみようか教科書忘れたんでしょ』

するとまことくんは一瞬びっくりした顔をして

それから言いました

『うるさいばかやろうだまれ』

めぐちゃんは悲しくなりました

気がついたら涙がでていました

真弓先生はめぐちゃんの頭をなでてくれました

『ありがとうめぐちゃんまことくんに親切にしてくれたんだね』

そしてまことくに言いました

『よかったねまことくんにはいいお友達がいるね

教科書は予備のを先生が持っているからね

今日はそれを使えばいいよ』

まことくんはしたを向いて黙っていました

お昼休みに真弓先生はめぐちゃんだけに話をしてくれました

『めぐちゃん聞いてくれるかなあ

まことくんね

お母さんが病気で小さいときに天国にいかれてね

お父さんと 二人だけで 頑張っただけなのよ

お母さんの役目もしながら お仕事をされてる お父さん
きっと 大変な ご苦労よね

寂しいことや辛いこと たくさんあるんだと 思うのよ

まことくんもね

お母さんがいないから 優しい言葉を かけてくれる 人がいないんだよね

めぐちゃんのお母さんみたいに 毎日 優しい言葉を かけてくれたら

めぐちゃんみたいに 優しいことを 当たり前で 言えるんだと おもうのよ

でも

まことくんの 心の辞書には お母さんの あったかい 言葉が入らないうちに

違う言葉が入っちゃったんだね

ほんとうは

『ありがとう』 と言いたいのに

『うるさい』って いってしまうのかも しれないね』

めぐちゃんはびっくりしました

ありがとうが うるさい になるなんて

どういふことなんだろう

家に帰って お母さんに 聞いてみました

『まことくんのお母さんのこと 聞いたこと あるわよ

まことくんがほんの赤ちゃんのときに天国にいったんだよね
お父さんと二人でずっと頑張ってきたんだね

大変なことね

二人ともお母さんがいないと寂しいだろうね』

お母さんは少し悲しそうに言いました

めぐちゃんはまことくんの言葉にはなにか秘密があるのかもしれないと思い始めました

学校が休みの日

公園で子犬と遊んでいるまことくんを見つけました

子犬とじゃれながら

『アハハ こいつなんだよ なめるなよ 顔くすぐったいよ

うるさいなあ うるさいなあ アハハ アハハ』と笑っていました

『もう あっちいけよ アハハアハハ』

と仲良く遊んでいるのです

めぐちゃんはびっくりしました

うるさい

とか

あっち行け

って嫌いな相手に言う言葉だと思っていたからです

でもまことくんは仲良しの子犬にその言葉をいっているのです

真弓先生の言ったことが少しわかりかけてきました

めぐちゃんはふと思い出しました

めぐちゃんは 前に お母さんと 喧嘩をしたことが ありました

お母さんが 先に 『ごめんね』と あやまってくれたのに 自分は まだ あやまりたくなかったので

『お母さんなんて 嫌い』と 言ってしまったんです

大好きな お母さんなのに

なぜか 『嫌い』と 口に出してしまったんです

そのあと めぐちゃんは 熱をだしました

嫌いといじわるをいった めぐちゃんを 一生懸命 お母さんは 看病してくれました

めぐちゃんには だんだん わかってきました

『言葉は 嘘をつくんだわ』

次の日 めぐちゃんは まことくんに

『おはよう まことくん』と めちゃめちゃな 笑顔で いいました

一瞬 びっくりした まことくんは

したを向いて 『うん』と いいました

いままで なにも 言わなかった まことくんが 『うん』と いってくれました

めぐちゃんは 最高に うれしくなっ て つい

『ありがとう まことくん』と また めちゃめちゃな 笑顔で 言いました

まことくんは すごく きょとんとした 顔をして すぐ したを向きました

耳が 赤くな っていました

算数の時間 まことくんは 教科書を 忘れました

真弓先生は めぐちゃんに 本を 一緒に みせてあげてねと 言いました

めぐちゃんは まことくんに 『一緒に みようね』と 笑顔で いいました

まことくんは 『うん』 と したを向いて 言いました

めぐちゃんは すごく うれしかったのです

そして 算数が 終わって 教科書を 片付けようとしたとき

『ありがとう...』

と 小さな声で まことくんが いってくれました

真弓先生が びっくりした 顔で まことくんを みていました

めぐちゃんは うれしすぎて 言葉が 口から でてきませんでした

心の中で

わあい

わあい

と 叫んでいました

おわり

どんなことをしてもあなたが大好き

アルパカの ヤミーちゃんはお金持ちの家に生まれました

お父さんのお仕事は 金融関係です

たくさんの資産があり 昔から お金を貸して その利息が 収入になっています

村に 災害があり 作物が 取れないときや

家族に重病人がでて お金が 必要なとき

みんなは ヤミーちゃんのお父さんにお金を 借りにきます

その利息を 払うために 一層 がんばって 働かなくてはならなくなり
身体をこわしたり

悲しい出来事が起きたりします

そんなとき ヤミーちゃんのお父さんは 人から 恨まれます

お父さんは 『人は 勝手なもんだ』と 怒ります

ヤミーちゃんは 時々 お友達から 嫌な事を 言われます

『あいつの 親父は 金貸しだ

ごうつくばり な 金貸しだ

血も涙もない 怖いやつだぞ』 と

ヤミーちゃんは 嫌な思いをしていることを お父さんには 言えませんでした

ヤミーちゃんにとっては 大切に 大好きなお父さんだからです

『 どうして お父さんは 人に嫌われるんだろう
どうしたら お父さんは みんなから 好かれるんだろう 』
ヤミーちゃんは いつも お父さんの幸せを 考えていました

ヤミーちゃんのお友達に アルパカの

アンナちゃんがあります
アンナちゃんは 兄弟がたくさんいて 少し貧しい 家庭にうまれました

元気で 少し 粗っぽい女の子ですが ヤミーちゃんがいじめられているのを みると

いつも助けてくれました

あるとき

アンナちゃんが 先生から 叱られていました

給食や月謝をずいぶん長い間 もってきていないからでした

アンナちゃんはうつむきながら 唇をかみしめていました
次の日 アンナちゃんは 学校に きませんでした

そして、しばらく きませんでした

アンナちゃんのお兄さん三人が 強盗をして 警察に 捕まったんだと お友達がいいました

ヤミーちゃんの胸は ドキドキしました

『アンナちゃん
どんなに 悲しいだろう』

ヤミーちゃんは こっそり アンナちゃんの家に行きました

アンナちゃんは 庭で 妹を おんぶしながら お洗濯を していました

ヤミーちゃんを見つけると 笑顔で 近づいてきました

『ヤミーちゃん どうしたの？』

家から遠いのに わざわざきてくれたの？』

『うん』

あの これね お勉強の ノートだよ よかったら あげるね』

『わあほんと？ うれしい～』

わたし 算数大好きだもん

しっかり 算数勉強して 早く お仕事できるようになりたいんだもん』

ヤミーちゃんはなんだか 涙が出そうになりました

『わたし お洗濯手伝えるよ してもいいかなあ？』

『わあ 家の中 狭くて 汚いけど いいのかなあ』

きてきて』

二人は お洗濯や お掃除を しながら 算数のお勉強をしました

警察に捕まえられた 三人のお兄さんは すごく 優しくて 尊敬してるんだと アンナちゃんは 悔しそうにいました

お父さんが 病気になってから 一生懸命働いたんだけど

アンナちゃんの 学校のお金や お父さんの 病気に必要な お金ができなくて 強盗をしてしまったんだよと

話してくれました

『でもね わたしは お兄ちゃんたちが 大好きだもん』

世界一尊敬してるんだもん
だれがなんていったって

すごいすごいんだから』

アンナちゃんは 目に涙をいっぱいためて 笑顔で いいました

ヤミーちゃんは 帰り道で 考えました

悪いことって なんなんだろう

悪いこと する人は 悪い人 と ばかりは 言えないんだ

優しくて 悪いことをすることもあるんだ
なにが 悪いのか なんだか わたし わからなくなってきた

ヤミーちゃんは その夜 眠りについて
亡くなった お母さんの 夢を見ました

お母さんは 優しい笑顔で ヤミーちゃんの頭を なでながら 言いました

『ヤミー もし あなたが 盗みをして も 人を 傷つけて も お母さんは 貴方が 大好きですよ

優しいあなたが もし そんなことを するとしたら
それには なにか 必要な 『思い』があったからだ と お母さんは 知っているからですよ

あなたの 痛み
あなたの 苦しみ

が あなたを そういう 行動に かりたて たんだと 信じています

わたしたち アルパカは 本来 みんな 優しい魂を 宿しています

その魂は 繊細で
たくさんの 冒険をする 目的で うまれて きています

してはいけないことなど 本人がよく わかっているのです

それでも してしまうことも あるのです

わたしたちは だれも 相手の 一部分を 裁くことなど できないのですよ

なぜなら みんなが わたしたちの できないことを かわりにしてくれているだけ

なのかもしれないからね

ヤミー

あなたが たとえ 何をして

わたしは あなたを 信頼していますよ

あなたの 一部分ではなく

あなたの 全部を 愛しているからですよ

安心しなさい 』

ヤミーちゃんは 久しぶりに お母さんに 抱かれて眠りました

次の日 学校に アンナちゃんが 来ていました

お兄さんが 無罪放免で 帰ってきたからでした

アンナちゃんは ヤミーちゃんに こっそり言いました

『 あかね ヤミーちゃんのお父さんがね 助けてくれたんだよ

でもね 内緒にするように 言われたの

ヤミーちゃん ありがとう』

ヤミーちゃんはびっくりしました

おうちに帰って お父さんの 顔を じっと みました

お父さんは ヤミーちゃんに 見つめられて びっくりしましたが

昨日の夜 夢に お母さんが でてきたと言いました

大好きなお母さんから アンナちゃんのお兄さんを 助けてあげるように お願いされたんだと 言いました

ヤミーちゃんはびっくり仰天しましたが

やっぱりお父さん大好きと 思いました

『お父さん ありがとう

お父さん だあいすき』

と 抱きつきました

お父さんは恥ずかしそうにヤミーちゃんの頭をなでました

おわり

嘘は優しい

子ネズミの まみちゃん は 本を 読むことが大好きです

家にいるときも
学校にいるときも
帰り道でも

いつもいつも 本を読んでいます

まみちゃんは
知りたがり屋さんです
知らないことを見つけると

気になって
気になってしかたありません

だから いつも たくさんの本を読みます

本には まみちゃんが 知らないことが たくさん書いてあるからです

そして まみちゃんには 知らないことを教えてくれる たくさんの 大人がいます

でも 最近 まみちゃんは 困っています

いま 一番知りたい ことについて 大人の 意見と 大人の言動が 違うからです

まみちゃんは いま

『嘘』について知りたいのです

幼稚園の時 に 先生が言いました

『嘘をついては いけません』

『嘘を言わずに 正直に 言いましょう』

学校でも 同じように言われました

でも まみちゃんはお父さんと お母さんには 言われませんでした

そこで お母さんに 聞いてみました

『お母さん 嘘をついては いけません

て 先生が 教えてくれたよ

それって なぜ いけないの？』

『あら まみちゃん いまは 嘘 が 気になってるのねえ』

『うん いま 気になってるの

教えて～』

『そうねえ

まみちゃんはお友達に いつもいつも 正直に 思った ように お話しているの？』

『うう～ん

言ってるときもあるし

言わないときもあるよ』

『言わないときって どんな 時なの？』

『うん

けんちゃんが ころんで 泣いたとき

どろんこズボンを 一緒に パタパタしたけど 涙 でてることは 知ってたけど

けんちゃんが急いで目をゴシゴシして頑張って笑ったから

涙のことは言わなかった

だってけんちゃん

男は泣かないもんだって いつも 言ってたもん』

『アハハ

そっかあ

けんちゃん いつも 元気だからねえ

涙なんて見られたくないよね

そっかあ

まみちゃんは優しいねえ

言わないことを選んだんだね』

『うん けんちゃん 強いねえ～

て言ったらね

けんちゃん 笑ったよ』

『そっかあ

もし まみちゃんが

泣いてる～～～ て 言ってたら けんちゃん 恥ずかしくて 辛かったかもしれないねえ』

『うん』

『思ったことや

見たことをいつもいつも 正直に 話すことが 正直 って いうのなら

仲良しのお友達に 嫌な気持ちを させてしまうことも あるかもしれないねえ

まみちゃんは

嘘を言ったことってある？』

『うう～ん

あるかなあ

あ

あった

はなちゃんね

時々 いじわるなことをするとき あるんだけどね

「わたしって 意地悪？かなあ」

て 聞かれたことあるの

「はなちゃんは 優しいよ」

て 言ったの

だって いつもは 優しいもん

時々 意地悪だけど いつもは 優しいんだもん

でも ちょっと 嘘ついたかなあ 』

まみちゃんは

「はなちゃん時々 意地悪だよ」と 心の中では 思いました

でも それを はなちゃんに 言いたくなかったんです

まみちゃんは 意地悪なことを いうことがあっても はなちゃんが 大好きだったからです

はなちゃんの 笑顔をみるのが まみちゃんは 嬉しかったからです

それも 嘘なのかなあ

嘘をついたら なぜ いけないのかなあ

『 まみちゃんは 優しいね

それはね 「優しい嘘」 って いうんだよ

もし 嘘をいうことが 誰かの 心を いためてしまうのなら ほんとうの ことを いうほうが よいんだ
ろうなあとお母さんは おもうのよ

でも まみちゃんみたいに

ほんとうに 思っていることの 中の 何を 言葉にするのかを

「優しい気持ち」

で 選ぶことって

大切なことだと お母さんは 思うよ

難しい言葉にするとね

「協調の嘘」というんだけど まみちゃんがわかるようにいうと
「優しい嘘」って かんじかなあ

「嘘をついてはいけません」という 言葉の意味はね

「人の心を傷つけてはいけません」
かもしれないね

』

まみちゃんは

そっかあ

それなら まみにも わかるう

と思いました

嘘をつくこと
思ったことを 思ったままに 言うこと

それじたいが 良い 悪い というよりも

大好きな お友達の 「心」を 笑顔にすることが 大切なんだなあ

まみちゃんは だんだん わかってきました
『お母さん

お父さんに 嘘をついたことある？』

お母さんと お父さんは 仲良しさんです

まみちゃんは 聞いてみたくなりましたあ
『あらあ

まみちゃん

女同士の 秘密にしてくれるかしら』

まみちゃんは ワクワクしました

『秘密するするう』

『じゃあ 言うわよ

お母さんは お父さんに

優しい嘘を 毎日ついていまあす

アハハ($\geq \nabla \leq$)

だって お母さんは お父さんが 大好きなんだもん

お父さんが 笑顔になるのが お母さんの お仕事なんだもん

お父さんが 言ってもらいたいこと

今日も たくさん 言うぞ～

て 毎朝 決めて起きるのよ』

まみちゃんは びっくりしました

お母さん 嘘たくさんついてたんだあ

『パパ 今朝も 世界一 男前なこと』

『力持ちで かっこいいわあ』

『世界一 働き者な パパの 奥さんになれて 幸せよ』

『パパは いつも 強くて 優しいわねえ』

『パパは なんでも 美味しそうに 食べてくれて うれしいわあ』

まみちゃんのお母さんは いつも お父さんに そう言っていました

『お母さん 全部 嘘なの？』

お母さんは 嬉しそうにいました

『全部 嘘ってわけじゃないのよ

ただね かなり 大げさに パパの 素敵なところを

先に 言葉にしてるって 感じかなあ』

楽しそうに お母さんは 言いました

まみちゃん は びっくりしながら

なんだか ワクワクしてきました

ピンポン

お父さんが お仕事から帰ってきました

『ただいまあ～

はあ～ 今日も 頑張ってきたよ～』

『パパ お帰りなさい

今日も 頑張ってきてくれて ありがとう

世界一 働き者な パパ～ 』

お母さんは そう言いながら お父さんをお迎えに 玄関に いました

後ろを振り向いて まみちゃんに ウィンクしながら 笑いました

おわり